

風よ

栢森定男俳句集



風よ

栢森定男俳句集

かやもりさだお



著者略歴

昭和2年6月16日 新潟県南蒲原郡加茂市新明町に生る。

昭和20年8月6日 江田島最北端幸の浦基地で訓練中、
原爆投下二時間後の広島中心街に救援にゆき被爆。

昭和16年 旧制中学2年の時、『学窓』に投稿。
地位入選。「旅僧の峠をゆくや春寒し」

平成13年1月 『あを』創刊会員。

平成15年 『あを』3月号掲載句にて終稿。

平成15年7月4日 0時52分永眠。76歳。



風よ

著作者 栢森定男

発行日 平成16年7月4日

発行人 栢森敏子

制作 竹僊房

〒164-0011
東京都中野区中央 2-50-3
☎ 03-3371-4623

あとがき

佐藤 喜孝

この「栢森定男句集」はご家族が整理された二千弱の作品から抄した畢生の句集である。句集名『風よ』は栢森敏子さんとの会話の中からヒントを得た。表紙の「風」は定男さんの故郷新潟の縁で良寛の書を使わせていただいた。扉の写真は定男さんと吟行した三宝寺池畔の茶店。ここに定男さんは坐られ句を案じておられた。

定男さんは若い頃から俳句をはじめられていた。句稿は一九四八年、二十一歳から録されていた。その後長く独学で作句されていたようだ。後年（一九九五年）栢森居で毎月句会が行われるようになり私もそこに参加した。その後句境もすこし変わられたが、ほとんど一貫して自己の俳句を頑ななまでに作られてきた。一つの世界を持った作家であった。

定男俳句の全句を読んでまづ、自然体で俳句が好きな人だなあと感嘆した。定男俳句の世界

は作者の理想の世界の具現であり、「善」なる世界を十七文字に現してそれを再確認するという心の風景俳句だと思った。

辞世の句ともなる「したたかにこの世を生き冬薔薇」を読んだときは驚いた。この強さは、全力で人生を生き、人を愛した人しか言えない俳句である。その時私の寸感ほ、

「したたかに」は自己に対して使う例は少ない。「したたか者」と他者に使う例が多い。定男さんは自己の歩みに強い自負があるからだろう。作者はわが人生の象徴に「冬薔薇」を選びとった。このやうな重たい季語もあるのだ。作者の言わんとする思いを「冬薔薇」はしっかりと受け止めてゐる。いま定男さんは、日夜難病と闘っておられる。『あを』二〇〇三年三月号）

私の定男さんへの挨拶文であった。この独白とも挨拶とも読める俳句を前に定男さんの人生に祝福をおくりたい。（二〇〇四年六月二九日記）

風よ

栢森定男俳句集

目次

春	5
夏	23
秋	37
冬	49

題字 「風」良寛
地紋 風紋文様

リハビリの妻と並びて落葉道

父はこゝに両手を揃へ居るよ吾子

したたかにこの世を生きて冬薔薇

露座仏の大きな耳朶に時雨降る

柴垣に透ける冬日のやはらかし

日短か年金生活夫婦たり

春



玄関の八つ手の花に日ざしあり

雑踏に妻の手を引く年の果

池に群れ鴨は光の粒となる

かじかみし手をあたゝめて孫を抱く

風邪の子が泣きてストーブ赤々と

枯芦に風鳴り蒼空ひろごれる

苗代の田水明りを風散らす

春星を止めて置きし森の上

日をへだてて本家と分家耕せる

花吹雪塊りのまゝ無頭海老

木の芽吹く裸像は固き乳房持つ

みごもれる妻春光を全身に

倒産のニュース流れて冬の雲

障子張りかへて師走の部屋となる

冬枯野線路は鈍き日をはじく

寒卵割りて暮らしの厳しき世

枯枝をはなるゝ小鳥足細き

商ひの青きをならべ雪の上

うたた寝の子の足汚れ遠蛙

雨の道春灯の影濡れてをり

草餅に少年の夢よみがへる

雨強し桜散るまいと耐へてゐる

海の音遠くに聞え露の臺

梅匂ふ夜空に星のまたゝける

干し物をたゝむ老母の背に冬日

木枯にどこまで続く細き道

底冷や病廊に鳴る時計たり

飽食してかなし炬燵に背をまるめ

倅せが生まるゝ如く粉雪降る

通勤の靴をはく背に花八つ手

白梅の小径郵便配りゆく

木蓮の花びら受けし地の固し

清水飲む背に山桜散り急ぐ

蝶の昼色彩やかに乳母車

朝日得て寒紅梅のあざやかに

庭を掃く春の訪れ感じつゝ

がばがばと新聞たゝむ雪止まず

凍る夜のぼろんぼろんと鳴る時計

肥桶にひかりを集め枯畑

寒厳し落書多きガード下

括られし桑富士山を遠景に

命がけかついで来た餅火にふくれ

ポトみなペンキ塗りたて春を待つ

仕舞湯に手足をのばす花疲れ

連翹を背に深々と会釈する

泥つきの苗の重さを舟にのせ

踏切のなかなか開かず春一番

春光の一つ一つの亀の甲

樹霊どこに眠る雪降り積る夜は

背後より昏れて行く道大枯野

凍夜教師生徒の遅刻眸で許す

水
温
む
も
ぐ
り
し
亀
の
現
れ
て

風
は
ら
む
む
郊
外
電
車
葱
坊
主

春
泥
を
越
え
て
灯
と
も
る
家
に
着
く

冬



よく笑ふ女客ゐて春座敷

春の海溢るゝばかり桜貝

タイプ打つ指軽やかに春日差し

走り来し犬下萌を嗅いでゐる

ゆきずりの雲を映せる芹の水

風車まはりゆっくり乳母車

連翹の黄に囲まれて古き家

いつまでも電話鳴りをり春遅し

山頂へ一本の道花霞

妻が剥き呉れしりんごを口で受け

秋の夜常のごとくに妻とゐる

甲斐駒は雲寄せつけず今朝の秋

かな文字のやさしい手紙鉄線花

春愁のピエロは化粧厚く塗り

蝶生れ光の中へこぼれ行く

桜貝生みし母なる青い海

花びらがかゝりて馬の目は優し

遠木立初蝶光こぼし行く

春草の上に置かれし道具箱

一燈を残し夜長の灯の消ゆる

厨房の隅まで月の射す良夜

掴みたる蝗の腹の柔らかし

みどり児の寝入りし後の虫時雨

校庭の木立の中に秋の蟬

虫の声途切れ唱題余念なく

春愁の眼鏡の玉を拭き忘れ

葱坊主児童揃って登校す

田も納屋も黄金一色秋豊か

音もなく猫駆けぬける秋の暮

庭の松刈られ梢の月涼し

夏



白桃の毛の水滴のみづみづし

夜を刻む雨音秋の深まりに

石仏の背に陽のあたる秋の道

きんいろの銀杏舗道をしきつめる

栗飯の湯気にならびし子の笑顔

蝸の翅の薄さよ夏終る

秋の風蛸焼の鯉節が散る

赤のまゝ上等兵の墓のそば

さんま焼く煙の中に父と子と

蟬時雨忘れ去られし忠魂碑

ぼうたんをてのひらで受け牡丹剪る

母と子の対話 苺をつぶしつゝ

セミナーの窓に湧く雲夏日受け

バラの芽のふくらみ雨に濡れてゐる

筍のはふり出されし土の上

白粉火花を散らすやうに咲き

厨房の隅まで月の射してをり

行人の小さくなりし野路の秋

夏の磯暮れて残りし波の音

庭下駄をつっかけ蟬の声聴きに

蟬の声高まり雷の遠ざかる

夏 薊 不 器 用 に し か 生 き ら れ ず

若 葉 雨 緑 に 濡 れ し 硝 子 窓

沖 を 航 く エ ン ジ ン の 音 初 夏 と な る

秋



夕焼けバラックじゅうが金色に見えるよ

舟漕げば水草ゆれて川とんぼ

風鈴の音の聞ゆる留守の家

平凡な暮らしの続く梅雨の家

原爆の想ひ出白き雲の峰

濁流の重なり合ひて梅雨大河

旅の宿出会ひ頭に火取虫

水浴びる子どもら路地に光り満つ

夕日射す袋小路に水を打つ

日没まで湧いては昇るキノコ雲

裸子のくびれし足が天をける

蟬時雨別れの言葉言ひ出せず

紫に濃淡ありて花菖蒲

沖に入道雲燈台に波寄せる

風にゆれ若葉ひかりの粒となる

夏桑にバスの残せし土煙

白い舟港に入りし枇杷熟れて

父と子が並びて持てる捕虫網

フィリピンにて

すゝき野に南国の空青く澄む

行商は片陰に来て荷を下す

原爆忌幾十万の無辜の民

百日紅わが口下手は父譲り